

「ハラールとハラームの関係」

@御徒町マスジドにおける 2018.4.6.金曜フトバ要約 by 杉本恭一郎

イスラームとは、アッラーの意思に従うこと、これが本質です。そしてイスラームは人類の祖アダムとハワー(イブ)のための教えでもありました。楽園にあるたくさんの木の中で、1本の木だけアッラーが、かれらに禁じた木がありました。「われら(アッラー)は言いました。アダムよ、あなたとあなたの妻とはこの楽園に住み、好きなだけたくさん食べなさい。ただし、この木に近寄ってははいけません。そうすれば不正な人になってしまうでしょう」(クルアーン 2章 35節)とあります。では、かれらが近寄ってはいけない1本の木、この木は何を象徴しているのでしょうか。

周知の通り、ムスリムと言え、あれがハラーム、これもハラームと、ありとあらゆるものが禁じられているようなイメージを、多くのノンムスリムは抱いています。しかしこれは真実ではありません。イスラームでは、アッラーが禁じたもの(ハラーム)は限定的です。ハラールとハラームとは楽園におけるあの1本の木のようです。1本の木だけがハラームなのであって、他のたくさんの木々はハラール、つまりアッラーに許可されたものです。6章 145節いわく、「言いなさい。わたし(ムハンマド)に啓示されたものの中には、**食べる人に食用が禁じられたものはありません。ただし、死肉、流れ出る血、豚肉は実に不浄なもの、またはアッラー以外の名を唱えられ(屠畜された)非法なものは別として(禁じました)**」とあります。つまり、**全ては人間のためにハラール(許されたもの)であるが、ただし一部のハラーム(禁じられたもの)を除く**という意味です。

ところが何が起きたのか、悪魔(シャイターン)は、アダムとハワーの所に来て、不死と永遠の王国の木に、あなた方を導きましようかと誘惑したのです。その木とはアッラーが禁じた木です。悪魔いわく、「あなた方の主(アッラー)が、この木に近付くことを禁じたのは、あなた方を天使や不死の者にならせないためなのだ」(7章 20節)と嘘をつきました。だからアダムは、悪魔に言われる以前は、永遠の命のことなど全く考えもしなかったのですが永遠の命とは何か気がになり始めたのです。それで永遠の命を欲しがるようになったのです。通常、幸せな人間は死にたいとは思いません。幸せなアダムはどう感じたのか。死にたくないと思ったのです。あの木からその実を食べなくてははいけないと思ったわけです。これが悪魔の仕業です。人間に悪いことに正義があり、正しい理由があるかのように思い込ませる悪巧みです。その木を極度に美化して、あたかもその木の実を食べないと人生が完結しないかのような錯覚に陥らせたわけです。

人間は、ハラームを消費しなくても生きていけます。栄養不足には決してなりません。だからクルアーンではハラールとハラームに関する言及があるときには、ハラームのアイテムしか明示されていないわけです。それ以外のハラールは山のようにあるからです。例えばお酒です。人間が飲むことができる飲料は、お酒の他にどれだけの種類があるのでしょうか。例えば豚肉です。人間が食べることができる肉(魚肉)は、豚肉の他にどれだけの種類があるのでしょうか。その他も、ハラームが特定できるものには、数えきれないほどのハラールの選択肢があるのです。

もちろん、現代社会では、自然食品よりも加工食品が圧倒的に支配するようになり、製造工程において、**ハラームがどのように混じるかが不透明な「疑わしい(シュブハート)」状況にあるのも確か**です。そして、人間は加工食品を消費しなくても生きていけます。しかし、現実には加工食品なしの生活は難しいでしょう。だから、加工における疑わしさをなくす作業が必要となります。これがいわゆる「ハラール認証」ですが、実質は「ノン・ハラーム認証」という意味です。つまりハラームがないことさえ証明されれば、それは疑いもない状態となり、ハラールとなり、ムスリムが消費できるようになるというわけです。